

日本の神学

33

序

理事 佐藤 吉昭

論文

旧約詩篇における敵対者と編集層

飯 謙

ダビデの哀悼歌「弓」の研究

中村 信博

パウロのテサロニケにおける伝道説教

原口 尚彰

オリゲネスにおける神の痛みの

オイコノミア

松丸 太

書評

Yuichi Osumi, *Die Kompositionsschichte des Bundesbuches*

大野 恵正

川村輝典『ヘブル書の研究』

笠原 義久

木ノ協悦郎『エラスムス研究』

徳善 義和

高柳俊一『カール・ラーナー研究』

小田垣雅也

近藤勝彦『歴史の神学の行方』

関川 泰寛

小田垣雅也『ロマンティズムと現代神学』

高森 昭

金子晴勇『聖なるものの現象学』

岡野 昌雄

加藤常昭『説教論』

上田 光正

その他

シンポジウム「現代における教会理解」

茂 洋・出村 彰・古屋 安雄・水垣 渉

神 学 年 報 1 9 9 4

日 本 基 督 教 学 会 編

オリゲネスにおける神の痛みのオイコノミア

松 丸 太

「常に教会とその正統的伝統を護るために全力を尽くした」⁽¹⁾「普通の・教会の人」⁽²⁾オリゲネスの『創世記第八講話』には、『創世記』第二章に書き記されているアブラハムの息子イサク奉獻に関するとても感動的な講話が残されている。オリゲネスはそこで、神によってその信仰と従順を試されたアブラハムが、神への愛と血肉への愛との板挟みの中で腸が引き裂かれるような思いを味わったのではなからうかと述べ、イサク奉獻の記事に神の御子キリストの派遣と受難を重ね合わせているのである。⁽³⁾この第八講話を初めて日本語に訳した小林稔師は、その翻訳の冒頭で次のように前置きしている。「教会は、父なる神が御子を死に渡したということの意味を知らせるために、このアブラハムの記事を読ませるのである。ところが、古代教会において、オリゲネスはその説教の中で、アブラハムの物語をすでにこの意味で解釈している」⁽⁴⁾。

もちろんこの講話を丹念に読んでみると、オリゲネスは、御父なる神ご自身が御子の派遣と受難に臨んでご自分の腸を痛めるのだとは、はっきり言っていない。しかしオリゲネスがこの講話で言う、断腸の思いという言葉は、ルフィヌスのラテン語訳では *paterna viscera cruciantur* ^{もろくは} *(immolandus filius) viscera paterna con-*

cusit⁽⁵⁾となっていて、オリゲネスが『ヘクサプラ』の中で『エレミア書』第三章二〇節の「我が腸痛む⁽⁶⁾」のギリシア語訳として紹介する、そのアキュラ訳およびシュンマコス訳の言い回しとほぼ一致するのである。⁽⁷⁾ 教皇ヨハネ・パウロ二世は、その回勅『いつくしみ深い神』の中でこの『エレミア書』の箇所を参照しながら、「主がご自分の民の不忠実に激しく怒り、かれらを顧みるまいと思いつめるときでも、かれらに対するやさしさと雅量のある愛とが、ご自分を責めて怒りに打ち勝つようにさせるのでした⁽⁸⁾」と述べて、人類のあがないと救いの歴史の中で啓示された、いわゆる神の「怒を克服せる神の愛⁽⁹⁾」を明らかにしている。してみるとオリゲネスもまた、人類のあがないと救いのオイコノミアの中で啓示された神の愛の苦しみの神秘的現実を、「身をふるわせているような神の愛の姿 (trepidans imago ipsius amoris)⁽¹⁰⁾」を認め、これをこの『創世記第八講話』で、信仰の父アブラハムの息子イサク奉獻の記事の中に投影し、表明しようとしていたのであろうか。

一

たしかに教会はその初めから、キリストのご受難の秘義を中心に据えて、いつくしみ深い神の苦しみの神秘的現実を公に認めていたように思われる。⁽¹¹⁾ たとえば五五三年にコンスタンティノーブルで開催された第五回公会議は、オリゲネスの思想を断罪する一方で、ヒュポスタシスという概念の明確化によって、受肉以前の御子なる神のヒュポスタシスとイエス・キリストのヒュポスタシスとのペルソナの同一性を確認し、イエスの受難と死去は、まさしく御子における神のご受難とご死去であることを高らかに宣言したのである。⁽¹²⁾ それは一九九二年に公刊された『カトリック教会のカテキズム』でも同様に確認されている。⁽¹³⁾ ところがJ・メイエンドルフによると、御子なる

神のヒュポスタシスとイエスの人間性との関係を *εὐνομοτατος* という概念によつて的確に把握するのに大きな貢献を果たしたのは、皮肉にもオリゲネス主義者、いわゆるビザンティウムのレオンティオスという人物だったのである。⁽¹⁴⁾ もちろんレオンティオスのこの貢献によつて、オリゲネスの断罪が有名無実化していたというわけではない。

実際、メイエンドルフが綿密に分析し明らかにしているように、後の公会議の光に照らしてオリゲネスの思想を見てみると、少なくともその思想の形而上学的前提には、教会の教えとしてはとても受け入れられないいささか思弁に過ぎる仮説が含まれている。つまり靈魂の先在という仮説と、受肉以前の神の御子と人間の魂との合一という仮説である。⁽¹⁵⁾ しかしそれらの形而上学的前提がどうであれ、P・ネメシエギ師が端的に立証したように⁽¹⁶⁾、現存するオリゲネスの数々の作品を読むかぎり、神の御子と人間イエスとのペルソナの結合および *αὐτῶνος ἰδιωτάτως* を、オリゲネスが事実上考え、これを信じて疑わなかったことは承認されねばならない。しかしそれは詰まるところ、オリゲネスが、神であり人イエス・キリストのご受難とご死去の内に、哲学的なアパテイアの理想を超えた、他ならぬ神の、御子における、ご受難とご死去、一般に受動性 *passibilitas* を見ていたということになるのではないだろうか。

もちろん、オリゲネスの神の受動性の問題を取り上げた研究者はわずかではあるがおり、深い洞察に富んだ結論を提出している。たとえばH・D・リュバクは、そのオリゲネス研究の記念碑的作品『歴史と霊』の中で、オリゲネスにおける神の愛はストア派の哲学的なアパテイアを超える情念である、だからこそオリゲネスの『雅歌注解』では、神がアガペーと呼ばれようがエロースと呼ばれようが問題にはならなかったのだ、神の情念とアパテイアのパラドクスを解く鍵は、人知を超えた神のいつくしみ、「愛の神秘 (τὸ τῆς ἀγάπης μυστήριον)」の内にあるのではなからうか、と述べている。⁽¹⁷⁾ なるほど『雅歌注解』をひもとけば、たしかにその序文に、アガペーとエロースに

ついで次のようなことが書き記されている。

「ですから、神が恋い求められる（エロース）と言われようと、神が愛される（アガペー）と言われようと、たいした違いはありません。また、ヨハネが神をアガペーと呼んだのにならつて、神をエロースと呼んでもべつだん非難されないとわたくしは思っています⁽¹⁸⁾」。

またH・クルゼルも、オリゲネスに関する幾つかの優れた著作の中で神の受動性に言及し、同様の見解を提出している。⁽¹⁹⁾かれは、オリゲネスの高弟グレゴリオス・タウマトウルゴスのある著作の真作性を検討した『不動な方の苦しみ』という小論では、オリゲネスを引き合いに出しつつ、神の情念は「ある根本的な苦しみ」「二つの契約の書の本質的なものを表している⁽²⁰⁾」と述べている。要するにド・リュバクとクルゼルによると、オリゲネスにおける神の愛は、アパテイアを超えるある神秘的なパトスであり、それは人類のあがないと救いのオイコノミアの内に啓示された「神の測りがたいつくしみ⁽²¹⁾」の中に洞察されるものである。

しかしながら、文献への忠実さと記述の的確さにおいて他に類例を見ないかれらの優れた研究にも、まことに惜しいことに、かれらがいくらか結論を急ぎ過ぎて十分な議論を尽くしていない点がある。それは、かれらの研究の出発点をなした神の諸情念とそれらの根底に潜む神の測りがたいつくしみとをオリゲネスの思想全体の中で総合的に結びつけ、かれの思想全体の中でその神の情念をいつくしみ深い神の愛の苦しみとして特定し確証するという作業が充分に行われていないという点である。そこで以下では、人類のあがないと救いのオイコノミアの内に現れるオリゲネスの神の諸情念とそこに潜む言いようのないいつくしみとの関係をかれの数々の作品の中に追究して、果たしてオリゲネスが本当に神の苦しみを考えていたのかを検討することにした。

オリゲネスの神は、たしかに、K・ラーナーを含め一連のオリゲネス研究者が一致して認めているように、⁽²²⁾その本性においては識られ得ず神祕の帳に包まれているが、理性的被造物の創造と救いのオイコノミアにおいて、御子の働きを通して聖霊の働きの内にご自分を顕わし、三位一体の神の愛を啓示するいつくしみ深い神として捉えられている。オリゲネスは、たとえば『諸原理について』の中で、理性的被造物の創造の原因を神のいつくしみに求められている。かれは言う。

「ご自分自身、すなわち、ご自分のいつくしみ以外には創造の動機を何一つお持ちにならなかつた」⁽²³⁾「その本性においていつくしみ深い神は、恵みを施す相手を持つことをお望みになり、かれらが恵みを受けて喜ぶように望まれた。そこで神は、ご自分に相応しい被造物、すなわち、ご自分を相応しく捉えることができる被造物をお造りになられた。そして神は『かれらの子として生んだ』⁽²³⁾と言われるのである」。

また『ケルススへの反論』では、神はすべての被造物をそのいつくしみの故に愛し、人間の神化を促す方として捉えられている。すなわち、

「(「造られたものをすべて愛される」) 神は、いつくしみ深いお方ですから、『悪人の上にも善人の上にもご自分の太陽を昇らせ、正しい人の上にも正しくない人の上にも雨を降らせて』、わたくしたちが神の子になるために、ご自分と同じようなことをするようにわたくしたちを促し、わたくしたちがすべての人々にできるかぎり恵みを施すように教えてくださるのである」⁽²³⁾。

そしてオリゲネスは、『ローマの信徒への手紙注解』の中で、神のいつくしみは、キリストのご受難に極まると述べている。曰く、

「実に、わたくしたちが神さまのみもとに立ち返る以前には、わたくしたちは不信心でした。しかしキリストさまは、とにかく、わたくしたちが信じる以前に、わたくしたちのために死をお受けになられたのであります。もしもわたくしたちに対してとても大きな愛を抱いておられなかったとすれば、わたくしたちの主イエス・キリストが不信心な者たちのために死なれることはなかったでしょうし、あるいはたぶん御父なる神さまがご自分の御独り子を不信心な者たちのあがないのために（死に）渡されることなどなかったでしょう。事実、正しい人のために死ぬ人はほとんどおりませんし、死の原因が正義のためであるとしても、誰しも死に服するのをためらうものです。ところが苦しみを受けられたときに、不信心な者たちと正しくない人たちのために死を堪え忍ぶのをお避けにならなかった方は、何と偉大でありましょうか。そしてわたくしたちに対するそのお方の愛には何と大きな重みがあることでしょうか、是非お考えください。言うまでもなくここにこそ、神さまの最高のいつくしみの明らかな証拠があるのでございます。実際このお方が、神の実体⁽¹⁾に由来するお方、『御父なる神さまの他に、いつくしみ深い方は誰もいない』と聖書で言われている御父なる神さまの御子でなかったとすれば、たしかにわたくしたちのためにこれほど大きないつくしみをお示しになることなどおできにならなかったでありましょう⁽²⁾」。

このようにオリゲネスは、神のいつくしみは創造と救いのオイコノミアの内に顕れ、とりわけ御子キリストの死の苦しみの内に溢れて余りある愛として極まる、と考えているのである。しかしオリゲネスが神のいつくしみを特別に強調するのは、人間に苛酷な仕打ちをする神の諸情念を扱う場合である。オリゲネスが、神の数々の情念とそれのいつくしみを多少とも主題的に検討している作品は、神に背いたイスラエルの民への裁きと苦難を話題にする

捕囚期の預言書を扱う講話は言うに及ばず、初期の作品から最晩年の作品に至るまで、かれの一連の作品の中に見出だされる。たとえば、わたくしが原文で実際に調査したかぎりのものを古い順に挙げてみると、『詩編注解』『創世記注解』『諸原理について』『殉教の勧め』『詩編講話』『エレミア書講話』『エゼキエル書講話』『創世記講話』『出エジプト記講話』『レビ記講話』『民数記講話』『ヨシヤア記講話』『サムエル記上講話』『ヨハネの黙示録スコリア』『ルカによる福音講話』『ローマの信徒への手紙注解』『ケルソスへの反論』『マタイによる福音講話』がある。それらの作品で述べられている、神のいつくしみについてのオリゲネスの考え方は、どの作品においても押し並べて定形的で、かれの初期の作品から最晩年の作品に至るまで一貫していると断言できるのである。

オリゲネスによると、神の諸情念は、人間の訓育と矯正、自発的な回心のために神のいつくしみに基づいて計画的に発せられたもので、神ご自身は常に平静を保っている。したがって神の情念は、人間の情念とは異なり有害なものではなく、常に人間に有益、度をこえることは決してない。神は、いつくしみ深く賢明な教師、父親、医師、一人の妻を愛する夫として冷静に振る舞い、無為に過ごすことはない。²⁶⁾

このようにオリゲネスは、神のいつくしみをオイコノミアのあらゆる場面に行き渡ると考え、オイコノミアのすべてを神のいつくしみの観点から解釈し、受け取っているのである。こうしたいつくしみに基づく神のオイコノミアについてのオリゲネスの基本的な考え方は、たとえば『エレミア書講話』に簡潔に述べられている。

「なるほど聖書が神さまを神さまご自身として語り、神さまのオイコノミアを人間的な事柄に結びつけていないときには、聖書は神さまが人間のようではないと言っておりませう。……(中略)……ところが神さまのオイコノミアが人間的な事柄に結び付けられませうと、神さまは人間的な思いと振る舞いと言葉とお持ちになります。それはちやうどわたくしたちが、二歳のこどもと話をするとき、こどものために幼稚な言葉をしゃべると同じような

ものであります。……(中略)……ですからもしも神さまの憤りと神さまの怒りを耳にしても、その憤りと怒りが神さまの情念になつてみるとみなしてはなりません⁽²⁷⁾」。

当然のことながら、オリゲネスのこうした発言の意図は、聖書に見られる粗悪な擬人神観をあげつらうギリシア哲学者やグノーシス主義者に対して、当時の教養ある人たちに広く普及していたパイディア思想を利用してキリスト教の神を弁護することにあつた⁽²⁸⁾。オリゲネスのパイディア思想の起源についてはそれまでの哲学的諸思想やあるいはたぶんアレクサンドリアのクレメンスなど、色々な人物の名を挙げることができる⁽²⁹⁾。しかし当のオリゲネスは、『エレミア書講話』や『マタイによる福音注解』でみずからはつきりと認めているように、ピロンの著作および当時キリスト教に改宗したあるラビによつて教えられたユダヤ伝承から、直接パイディア思想を導き出し、それを発展させようと努めている⁽³⁰⁾。したがつて擬人神観の問題へのオリゲネスのアプローチの仕方は、たとえばピロンのそれと著しく類似しているのである。

実際ピロンは、*Quod Deus sit immutabilis* という論考の中で、次のように言っている。

「すなわち、掟と戒めの内に成り立つ律法——これこそ厳密な意味での律法である——の中で最も重要な命題が二つ、(宇宙万物の)原因について提示されている。一つは、『神は人間のようなではない』ということであり、もう一つは、『神が人間のようなである』ということである。ところで前者の命題は、最も確実堅固な真理として信じられており、他方、後者の命題は、多くの人たちの(初歩的な)教育のために(その手ほどきとして)導入されたものである。まさしくそういうわけで神について、『主なるあなたの神は)人間のようにご自分の子を教育される』と(モーセによつて)言われているのである。したがつて神は、教育と譴責のために人間のようなと言われているのであつて、その本性においてそうだと言われているのではない⁽³¹⁾」。

ピロンによると、神の擬人的表現は、神の下僕モーセがいわば病める魂の医師となつて、神をありのままに受け容れることができないう読者の利益のために比喩的に語つたものである。したがつて神は、教育と譴責のために人間のようなと言われているのであつて、本性においてそうだとされているのではない。しかし神がそうした擬人的表現をモーセに許すのも、宇宙万物をその永遠のいつくしみの故にお造りになつた神が、まさしくその完全ないつくしみの故に、罪の重みで倒れかかつた人類の滅亡を許さず、「神の周りにあつてまばゆいばかりの光を放射するあの造られざる力 (*et æternæ divinitæ ætæna*)」をとおして、救いをもたらす憐れみを惜しみなく分け与えるからである。⁽³²⁾

他方、オリゲネスは明らかに、ピロンの著作に見られるそうした擬人神観の扱い方を踏襲している。実際かれは、『マタイによる福音注解』で次のように述べて、擬人神観の問題に着手しているのである。

「わたくしたちの先人の一人は、聖なる律法の諸書を数々の比ゆとみなすことによつて、神があたかも人間の情念を持つお方であるかのように表現している言葉と、神の神性を明示している言葉を詳しく説明している。その人は、人間たちを配慮してくださる神が人間のものであると言われていることに関して、ある一つの言葉を取り扱っていた。それは、『主なるあなたの神は、ある人間が自分の息子を背負うように、あなたを背負われました』という言葉である。また、神が人間のものではないと言われていることに関しては、『神は人間のように偽らない』という言葉を取り扱っていた。⁽³³⁾」

たぶん擬人神観の問題の処理の仕方は、既にオリゲネスの時代にはユダヤ・キリスト教の側である程度定形化されていて、人口に膾炙していたのだろう。

しかしながら、オリゲネスの数々の作品をつぶさに検討してみると、かれの擬人神観の扱い仕方には、かれの前任者たちには見られない「ある種の新しさ」「深さ」「大胆さ」そして神のあがないの秘義を充分弁えた上での動揺とためらいがあると言わざるを得ないのである。³⁴一般に教皇ヨハネ・パウロ二世やH・クルーゼ師が言われるように、いつくしみという言葉を表すヘブライ語の一つ、ヘセド (hesed) は、「内面の深いよさの心情 (bonitatis intimus affectus)」を示し、それは契約の当事者双方が互いに義務を負い忠誠を誓い合うといったある双務的な関係の上に成り立っている。³⁵この見地からピロンの既述の見解を額面通りに受け取れば、かれのいつくしみについての考え方は、双務的であると言うよりも、神がそのいつくしみの故に、まさしくそのいつくしみの名にかけて、一方的に憐れみを垂れるという点で片務的であり、当事者双方の内面性が欠けていてひどく外面的であると言わなければならない。クレメンスの場合にも同様のことが言えると思われる。たとえばかれの *Tractatus* には、次のような、神のいつくしみの内面を穿つとも有名な言葉がある。

「そればかりか、怒りの情念も、たとえ神による譴責を怒りと呼ばねばならぬとしても、神の人類愛に根差している。神はその人類愛によって人間のための数々の苦しみの中へと降って行かれ、さらに神のみ言葉も人間のためにまさしく人間となられたのである」³⁶。

しかしド・リュバクやJ・リストが指摘しているように、クレメンスは神のいつくしみとストア派のアパテイアの理想との整合性を言葉巧みに求めるのに腐心する余り、結果的には神のいつくしみの深い内面を見えなくさせる

という弊害を招いているように思われる。⁽³⁷⁾ビッグがいみじくも述べているように、やはり人類のあがないと救いの業についてのクレメンスの理解はドケティズムに近く、⁽³⁸⁾また不明瞭さを常に残しているのである。

ところがオリゲネスの場合には、仮現説はきつぱりと斥けられて、それに応じていつくしみ深い神の「内面の深いよさの心情」とそれに基づく苦しみが明瞭に打ち出されていると言わざるを得ない。たとえば「ケルソスへの反論」では、人間の身体と魂とお取りになられた神であり神の御子イエス・キリストは、そのいつくしみと人類愛の故に、⁽³⁹⁾「自分の意のままにならない人間の苦痛と苦悩をも合わせてお取りになったのであり、復活が真実なものとなるために本当に死なれた、と言われている。また、『マタイによる福音注解』には、次のような言葉が残されている。

「集まってきた群衆に対して）情に流されない方（である神のみ言葉）は、人を愛される方であるが故に、⁽⁴⁰⁾（ご自分の）腸を痛めて苦しまれた（*ὡς δαδάβουτος κενούδεν ὁ θράθης ὁ σπικρυωθῆναι*）」。

もちろんオリゲネスも、キリスト教の弁護のために神の *θράθης* を主張するのにやぶさかではない。しかしそれでもなおオリゲネスは、神の救済の摂理とあがないのリアリティー、神のオイコノミアの真实性を主張しなければならなかったのだ。『エゼキエル書講話』⁽⁴¹⁾でみずから回顧しているように、殉教者の父を誇りにし常に殉教を志していたオリゲネスが、「殉教の勧め」の中で、自分の弟子であり友また後援者であったアンプロシウスおよび同僚の司祭プロクトテトスに向かって、キリストの苦しみを共有することで殉教の凱旋行進に連なり、キリストの慰めを共有しよう⁽⁴²⁾と言う一方で、神であり神の御子キリストのご受難は、**実**に見せ掛けのものに過ぎなかった、などは口が裂けても言えなかっただろう。神の情念といつくしみに言及するオリゲネスの作品をいくつか注意深く読んでみると、たしかにクルゼルがしごく簡単に言っているとおり、人類のあがないと救いのオイコノミアの中で啓示

される神の情念は、教育的な経緯に基づいて計画的に発せられる情念の見せ掛けという水準を超えて、神の「ある神秘的な現実」⁽⁴³⁾を差し示しているのであって、それらは、御父と御子と聖霊のペルソナから完全に締め出されているわけではないのである。オリゲネスの数ある瞳目すべき発言の中からいくつかを挙げてみると、たとえば『エゼキエル書講話』では、神の怒りの原因は神自身にはなく罪を犯した人間にあるとしても、それでも神は、その豊かないつくしみをないがしろにされれば、怒ると言われ、⁽⁴⁴⁾『民数記講話』では、神はその本性においては不動であると言われながら、御父も御子も聖霊もそして天使たちも人類の救いのために喜怒哀楽を味わうことが延々と語られている。⁽⁴⁵⁾そして『出エジプト記講話』では、オリゲネスは次のように述べているのである。

「ご覧ください、神のいつくしみを。見てください、どうして神さまは、わたくしたちを教育し完成された者とするために、神さまご自身が人間の感情の脆さを拒まれないのかを。実際、一体誰が、神さまが嫉む方であると聞いてただちに驚かず、人間の脆さという欠点を思わないでしょうか。ところが神さまは、わたくしたちのためにすべてを行いますべてを堪え忍ばれ、わたくしたちが教育されるようにと、わたくしたちによく知られた馴染み深い感情でもってお話しくさるのであります」⁽⁴⁶⁾。

すなわち、本来情に流されなはずの神は、その深いいつくしみの故に人間の脆い情念を意図的に抱くとはいえず、しかしそれでも神は、すべてを堪え忍ばれる、とオリゲネスは考えているのである。たしかにオリゲネスはここで、教育のオイコノミアの背後に神の曰く言い難い難いある神秘的な情念を予感しているのでなければ、「神さまはわたくしたちのためにすべてを行いますべてを堪え忍ばれる」とは言い添えなかつただろう。同様の説明は、『マタイによる福音注解』の次の言葉にも当てはまる。オリゲネスは、御父なる神も、御子なる神と同様に、あらゆる点で神のまま留まっておられながら、神をありのままに受け容れることができないう人間のために人間の受動的な本性

にご自分を合わせられたと述べた上で、大胆にもこう言い切っているのである。

「神が、人間たちを配慮するとき、たとえ話の中でいわば人間のようだと言われ、またたぶんある意味でまさしく人間にもなるのと同じように、救い主もまた、際立った仕方では神の御子であり神、また神の愛の御子であり見えざる神の像ですが、際立った仕方であることに留まらずに、——たとえ話の中で人間であると言われますが、しかし神である方の——オイコノミアに従って、人間の子であると言われます。(救い主はその際)人間たちを配慮するときにたとえ話の中で人間であると言われる神、またある意味で人間にもなる神を模倣しているのである」⁽⁴⁷⁾

つまりオリゲネスは、御父なる神が、その見えざる神の像であり愛の御子であるキリストの受肉の模範として、ただたとえ話の中で人間のようになるのだと言うことに満足せず、またある意味で人間にもなる二度も言っているのである。加うるに、『エゼキエル書講話』の次の言葉は、読者を吃驚仰天させるにちがいない。

「救い主は、かたじけなくもわたくしたちの肉体を取り、十字架の苦しみを堪え忍ばれるに先立って人類を憐れまれ、そしてこの地上にお降りになり、わたくしたちの苦しみを堪え忍ばれました。実際、救い主が(ご降誕以前)苦しまれていなかったとすれば、かれは人間の生命の交わりの中にはお入りになられなかったでありましょう。先ず、救い主は苦しまれ、次いでお降りになり、(人間に)見られるようになられたのであります。わたくしたちのために堪え忍ばれたその苦しみとは何でしょうか。それは愛の苦しみです。また宇宙万物の神である御父ご自身も、『寛大でとても憐れみ深い』お方、憐れみの主ですから、どうしてそうしたお方がある意味で苦しまれないのででしょうか。それともあなたは、神さまが人間をご配慮なさるとき、人間の苦しみを堪え忍ばれるということをご存じないのですか。実際、『ある人間が自分の子を背負うように、あなたの主である神はあなたの苦悩を背負われた』のであります。神の御子がわたくしたちの苦しみを荷われるのと同じように、神さまはわたくしたちの苦

悩を荷われます。実に御父ご自身、苦しめない方ではございません。御父なる神さまは、乞い求められれば憐れみ覚え、共にお苦しみになり、何程かの愛の苦しみを忍ばれます。そしてご自分の本性に比べれば（本来）あり得ない事柄の中に身を置かれ、わたくしたちのために人間の苦しみを荷われるのであります⁽⁴⁸⁾」。

オリゲネスによると本来情に流されないはずの神は、そのいつくしみの故にまさしく人間的な情に流され、何程かの愛の情念を、キリストのご受難に引き合わせてこれを言い換えれば、何程かの愛の苦しみを忍ばれる。したがってその点で御父なる神は苦しめない方ではないと言われているのである。同じ『エゼキエル書講話』には、また次のようなことも言われている。

「何といつくしみ深い神さまでしょうか。神さまはご自分を拒んだ人たちに対してさえも深い悲しみの涙を流されております。そしてこれは愛の感情に由来しているのです。実際、自分が憎んでいる相手を嘆き悲しむ人は誰もいません。それなのに嘆き悲しまれる（当の）相手は、なるほど（罪を犯して）死んだ者として嘆き悲しまれるのであります。しかし（かれは）いまでも探し求められているかのように、あたかも生命の望みの内にあるかのように、（神さまに）愛されているのであります⁽⁴⁹⁾」。

神に背き、罪を犯して死んだ者に悲嘆の涙を流し、かれをいまでも生きているかのように探し求める神の、いつくしみに基づく愛は、愛の苦しみをなくして他に何であらうか。

これらの発言によつてオリゲネスが、神の深いいつくしみの中に、取り分けその御子キリストのご降誕とご受難を通して、「いわば人間的な」としか形容できない神の愛の苦しみの神秘的なパトスを予感し、推量していたことは明らかである。したがつたとえオリゲネスが明言を避けているとしても、かれが『創世記第八講話』で最愛の我が子を断腸の思いで神に捧げるアブラハムのイサク奉獻の物語に、御子キリストを死に渡された神の筆舌に尽く

し難い愛の苦しみの現実を、言い換えれば神の痛みの秘義を重ね合わせ、それを表明しようとしていた、と結論しても的を外したことはないだろう。なぜならば、オリゲネスの神は、人類のあがないと救いのために御子キリストを惜しみなく死に渡されたいつくしみ深い愛の神であると同時に、他者からのひたすらなる愛を求め、愛する者の喪失を惜しみかつ許さず、嫉妬に燃え立ち、愛する者をご自分に引き戻すためにあらゆることをする嫉みの神としても、表現されているからである。⁽⁵¹⁾

最後に、問題の『創世記第八講話』の言葉をいくらか引用して、本論を締め括ることにしたい。

『「お前が神を畏れていることをわたしはいま知った」。たしかにこれらの言葉はアブラハムに言われました。そしてかれが神を畏れていることが宣言されたのであります。なぜでしょうか。それはかれが自分の息子を惜しまなかったからであります。わたくしたちはここで、これらの言葉をパウロの言ったことと比べてみましょう。パウロは神さまについて次のように言っております。『神さまはご自分の御子を惜しまれず、わたくしたちすべてのためにかれを（死に）渡されました。』⁽⁵²⁾ ご覧ください、神さまは、人間たちと、高邁な惜しみなさを競い合っているのであります。すなわちアブラハムは、いつかは死ななければならぬ息子、（しかし神さまの約束によれば）死ぬはずのなかった息子を神さまにお捧げいたしました。他方、神さまは、死ぬはずのない御子を人間たちのために死に渡されたのであります。このことについてわたくしたちは何と申し上げればよいのでしょうか。『わたくしたちに与えてくださったすべての恵みに対して、わたくしたちは一体何を以て主に報いましょう。』御父なる神さまは、わたくしたちのためにご自分の御子を惜しまれなかったのであります。⁽⁵²⁾

死ぬはずのない最愛の我が子を死に渡す父親の内面（心情）は、単なる惜しみなさという言葉一つで、言い尽されるものではあるまい。

まとめると、「常に教会とその正統的伝統を護るために全力を尽くした」オリゲネスは、教会の普遍的⁽⁵³⁾一致を揺るがしかねない粗悪な擬人神観の問題にこだわり続けた。そこでかれは、当時流布していたパイディア思想を最大限に利用して、機会あるごとに賢明な神の *impassibilitas* を主張した。しかしそれにもかかわらずオリゲネスは、人類のあがないと救いのオイコノミアの中で啓示された、キリストのご受難に極まる、いつくしみ深い神の愛の苦しみの神秘的現実を否定することができず、ある時には曖昧な表現を用いて神の *passibilitas* をほのめかし、ある時には「ある意味で」という限定を付けて、恐る恐ると神の受動性を表明し、遂には神は「苦しめない方ではございません」と叫ばずにはいられなかつたのである。しかしかれが神の苦しみの問題を前にして両義的な発言をするのも、オリゲネスが粗悪な擬人神観を警戒していたということは言うまでもなく、オリゲネスがしばしば告白しているように、かれが人間には究め難い神の内的な生命の神秘を前にしていたからに他ならない。⁵⁴ この問題の正式の解決はしかしおよそ三百年後の、御子なる神における神の不動の本性と苦しみとの二律背反をそのまま受け容れる、神のペルソナ概念が確立され承認された第二コンスタンティノーブル公会議を待たねばならなかつたのである。⁽⁵⁵⁾

注

(1) 有賀鐵太郎『オリゲネス研究』(著作集一) 創文社、一九八一年、九九頁。

- (2) SerMatth. 50 (GCS II-2, p.107, 120) et HomLuc. II, 2 (GCS 9, p.13, 1.8). Ces mots fréquents chez Origène.
- (3) HomGen. VIII, 1-10 (GCS 6, p.77, 1.10-p.86, 1.15).
- (4) 小林稔「アブラハムが自分の子イザアクを捧げたことについて・オリゲネスの創世記についての第八の説教」『カトリック神学』第十七号、一九七〇年、一三三—一三九頁。Cf. Liturgia Horarum, III, Vat. 1986, p.149sq.
- (5) HomGen. VIII, 4 (GCS 6, p.80, 1.12); VIII, 6 (p.81, 1.14).
- (6) 北森嘉蔵『神の痛みの中の神学』講談社学術文庫、一九八六年、二六頁。
- (7) Cf. Origenis Hexaplorum quae supersunt, éd. F. Field, vol. 2, Hildesheim, 1964, p.659.
- (8) Ioannes Paulus Pp. II, Litt. Encycl. Dives in Misericordia (30, Nov.1980), 4: AAS 72 (1980), p.1188.
- (9) 北森嘉蔵「上掲書」五五頁「しかるに神はこの怒の対象たる我々を愛し給うた。かく怒を克服せる神の愛こそ神の痛みである」。
- (10) Ioannes Paulus Pp. II, op. cit. p.1189, n.52 = 『ふくむみ深き神』(沢田和夫訳)一九九二年、八九頁。
- (11) Cf. F. D. Bernardo, *Mystique de la Passion*, Dict. Spir. vol.12, Paris, 1984, col.312; et eg. Act.20, 28; I Cor. 2, 8; Phil. 2, 6-8; Ignace d'Antioche, Ep. ad Rom. VI, 3 (éd. J. A. Fischer, Darmstadt, 1965, p.188, 1. 16-17): *ἐμπρόσθε μου μυστηρίον εἶπα τοῦ πένθους τοῦ θεοῦ μου*, Notons qu' une phrase de cette épître: «*ὁ θεὸς ἔσωσεν ἑσραβώματα*» (VII, 2, p.190, 1.4-5) est citée par Origène dans *CommCant. Prol.* (GCS 8, p.71, 1.26). Voir *infra* note 18.
- (12) Cf. H. Denzinger, *Enchiridion symbolorum*, Freiburg im Breisgau, 1991³⁷, c.424 et 432.
- (13) *Catechisme de l'Église Catholique*, Paris, 1992, p.104, c.468-469; et cf. *Officium B. V. Mariae*, Ant. Laudum: *Mirabile mysterium: Oratio Ss. mi Corporis et Sanguinis Christi: Deus, qui nobis sub sacramento mirabili passionis tuae memoriam reliquisti...*; Ioannes Paulus Pp. II, *Epist. Salvifici Doloris* (11, Febr. 1984), 17:

- (17) Cf. J. Meyendorff, *Christ in Eastern Christian Thought*, SVS-Press, New York, 1987, pp.61-68.
- (18) Cf. eg. De Princ. II, 6, 3-7 (GCS 5, pp.141, 125sq); CommJoh. XX,19, 162 (GCS 4, p.351, 124sq).
- (19) Cf. P. Nemeshegyi, *La Paternité de Dieu chez Origène*, Belgium, 1960, p.166; De Princ. II, 6, 2 (GCS 5, p.140, 125sq); II, 6, 3 (p.143, 12sq); HomJér. XV, 6 (GCS 3, p.130, 11sq) et alia multa.
- (20) H. de Lubac, *Histoire et Esprit, l'Intelligence de l'Écriture d'après Origène*, Aubier, 1950, pp.243sq; cf. A.H. Armstrong, *Platonic Eros and Christian Agape*, Downside Review 79, Bath, 1961, pp.105sq. Et pour les mots grecs « τὸ τῆς ἀγάπης μυστήριον », cf. HomLuc. fragm.171 (GCS 9, p.298, 1.2).
- (21) CommCant. Prol. (GCS 8, p.71, 122-25); cf. Ibid. (p.69, 1.12sq). Traduction d'après le P. T. Odaka, mais modifiée un peu. Cf. 小高繁徳『基督教論』創文社'一九八二年'三八頁。
- (22) H. Crouzel, *Théologie de l'Image de Dieu chez Orig. Aubier*, 1955, pp.257sq; Orig. et la Connaissance Mystique, Desclée De Brouwer, 1961, pp.258sq; Virginité et Mariage selon Orig., 1963, pp.66sq.
- (23) H. Crouzel, *La Passion de l'Impassible: dans L'Homme devant Dieu (Mélanges)*, vol. 1, Aubier, 1964, p. 277.
- (24) Cf. HomNum. VIII, 1 (GCS 7, p.49, 1.17); XVI, 4 (p.143, 1.3sq); SelEzech. <XIV, 6 Lomm.> (GCS 8, p.320, 1.30); Comm Rom. V, 1 (PG 14, 1006D); HomLev. IX, 8 (GCS 6, p.435, 1.9sq) etc. Presque tous trouvés par moi-même.
- (25) Cf. eg. K. Rahner, *La Doctrine d'Orig. sur la Pénitence*, RSR 35 (1950), pp.49sq; H. U. von Balthasar, *Le Mystère d'Orig.* RSR 26 (1936), pp.513sq et 27 (1937), pp.38sq; H. Crouzel, *Orig. et la Commais*, pp.85sq etc.

- (83) De Princ. II, 9, 6 (GCS 5, p.169, 1.20-25); IV, 4, 8 (p.359, 1.11-14); Ies. 1, 2; cf. CommGen. fragm. (PG 12, 48B); P. Nemeshegyi, op. cit. p.111; Conc. Vat. II, Const. Dogm. De Ecclesia, Lumen Gentium, n.2: AAS 57 (1965), p. 5.
- (84) C. Cels. IV, 28 (GCS 1, p.297, 1.12-16); Matth. 5, 45.
- (85) CommRom. IV, 10 (PG 14, 998 AB); Marc. 10, 8. Voir aussi CommJoh. I, 32, 231 (GCS 4, p.41, 1.12-16).
- (86) Eg. SelPs. II (PG 12, 1105 Csq); CommGen. fragm. III, 10 (Philoc. 23); HomJud. II, 4 (GCS 7, p.477, 1.23sq); Homezech. I, 1 (GCS 8, p.320, 1.12sq); HomPs. XXXVII (PG 12, 1369 Bsq) et alia multa.
- (87) HomJer. XVIII, 6 (GCS 3, pp.158, 1.9sq); cf. eg. ScholApoc. XXX (TU 38, 3, 35); HomISam. IV (GCS 3, p.296, 1.1sq).
- (88) Cf. H. Koch, *Pronoia und Paidensis*, 1979, NY, pp.13sq; H. de Lubac, op. cit. p.239sq; P. Nemeshegyi, op. cit. pp.129sq.
- (89) Cf. H. Koch, op. cit. passim; J. Daniélou, *Orig. eng. tr.* New York, 1955, pp.86sq; H. de Lubac, op. cit. p.56, n.56.
- (90) HomJer. XX, 2-3 (GCS 3, pp.178, 1.9sq); CommMatth. XVII, 17 (GCS 10, p.635, 1.16sq); Cf. G. Bardy, *Les traditions juives dans l'œuvre d'Orig.* Rev. Bibl.34 (1925), pp.217sq; N. R. M. de Lange, *Origen and the Jews*, Cambridge, 1976, pp.15sq; H. Crouzel, *Théol. de l'Image*, p.70.
- (91) Philon d'Alexandrie, *Quod Deus sit immutabilis*, Œuvres 8, éd. A. Mosès, Paris, 1963, § 53-54 (pp.88-90); Num. 23, 19; Deut. 8, 5.
- (92) Ibid. 61-108 (pp.96-116). Pour les *δουκτες* incréées, voir Ibid. 78 (p.102).
- (93) CommMatth. XVII, 17 (GCS 10, p.635, 1.16-30); Deut. 1, 31; Num. 23, 19.

- (45) Cf. eg. HomExod. VIII, 5 (GCS 6, p.229, 1.7sq); H. Crouzel, *Théol.* p.259; Orig. et la Philosophie. pp.190sq. 96
- (46) Cf. Ioannes Paulus Pp. II, *Litt. Encycl. Dives in Misericordia*, p.1189, n.52; H・シムネーヤ『神蹟・イエスの預言者の神学』南窓社、一九七四年、一五頁。
- (47) Clément d'Alexandrie, *Paedag.* I, 8, 74, 4 (GCS 1, p.133, 1.22-25).
- (48) Cf. H. de Lubac, op. cit. p.242; J. M. Rist, *Eros and Psyche*, Toronto, 1964, p.197; cf. H. Crouzel, *Théol.* p.69; H. Koch, op. cit. p.267; Clém. Str. 4, 6, 38, 1 (GCS 2, p.265, 1.11sq); 2, 8, 40, 1 (p.134, 1.7sq) et alia multa.
- (49) Cf. Ch. Bigg, *The Christian Platonists of Alexandria*, repr. 1981, Hildesheim, pp.71sq.
- (50) C. Cels. II, 23 (GCS 1, p.152, 1.11sq); II, 16 (p.145, 1.12sq); cf. HomGal. I,11-12. fragm. (PG 14, 1295 Asq).
- (51) CommMath. X, 23 (GCS 10, p.32, 1.26-p.34, 1.6); cf. HomLuc. fragm. 53 (GCS 9, p.249, 1.9-11); 梶谷甲一「純粹経験(西田幾多郎)と超越論的経験(K・レーナー)との出発点をめぐって」『日本カトリック神学会誌』第二号、一九九一年、九五-九六頁。
- (52) HomEzech. IV, 8 (GCS 8, p.368, 1.31sq); HistEcl. VI, 2.5-6 (SC 41, p.84); VI, 3.4-7 (p.87sq).
- (53) Exhort. XLII (GCS 1, p.39, 1.8-p.40, 1.11).
- (54) H. Crouzel, *La Passion de l'Impossible*, p.275; cf. *Ibid.* p.278; Orig. et la Connaissance, p.259.
- (55) HomEzech. X, 2 (GCS 8, p.419, 1.30-p.420, 1.10); cf. eg. CommRom. I, 2-3 (PG 14, 874 C-875A); H. Crouzel, *L'Hadès et la Géhenne selon Orig. Gregorianum* 59, Rome, 1978, pp.291sq.
- (56) HomNum. XXIII, 2 (GCS 7, p.212, 1.1-p.213, 1.21).
- (57) HomExod. VIII, 5 (GCS 6, p.227, 1.1-6): ...omnia propter nos et agit et patitur Deus...
- (58) CommMath. XVII, 20 (GCS 10, p.641, 1.6-22): ...τάχα δὲ πῶς καὶ γίνεταί... κινουμένου πῶς θίβωται...
- (59) HomEzech. VI, 6 (GCS 8, p.384, 1.12-p.385, 1.3); Ps. 103, 8; Deut. 1, 31; ...Ipse pater non est impassibilis...

- (9) Ibid. XIII, 2 (GCS 8, p.443, 1.7-10).
- (10) Cf. H. Crouzel, *Mort et Immortalité selon Origène*, Bull. Litt. Eccl. 79, Toulouse, 1978, pp.20sq.
- (11) HomExod. VIII, 5 (GCS 6, pp.227, 1.1sq); Exhort. IX - X (GCS 1, p.9, 1.24sq); CommCant. Prol. (GCS 8, p.70, 1.9sq; p.71, 1.13sq); Ibid. III (p.186, 1.13sq; p.198, 1.16sq); II, 8 (p.52, 1.17sq); HomLuc. XXV, 6 (GCS 9, p.151, 1.7sq).
- (12) HomGen. VIII, 8 (GCS 6, p.84, 1. 1-9); Gen. 22, 12; Rom. 8, 32; Ps. 116, 12.
- (13) Cf. CommTit. 3, 10-11, fragm. (PG 14, 1303 Csq); CommICor. IV, JTS. IX, 1908, p.234; HomEzech. IX, 1 (GCS 8, p.405, 1.30sq); HomIReg. I, 4 (pp. 5, 1.21sq); HomLev. V.12 (GCS 6, p.358, 1.6sq); G. Bardy, *La Règle de foi d'Orig.* RSR 9 (1919), pp.162sq; H. de Lubac, op. cit. pp. 61sq.
- (14) Voir supra notes 22 et 34.
- (15) Pour la conception de l'hypostase comme ouverte à la passion, on devrait voir attentivement et sans aucun préjugé J. Meyendorff, op. cit. p.77.

THEOLOGICAL STUDIES IN JAPAN

[ANNUAL REPORT ON THEOLOGY No. 33, 1994]

FOREWORD : Y. Sato

ESSAYS :

- On the Antagonists and its Arrangement in the Psalter K. Ii
A Study on David's Lament over Saul and Jonathan
..... N. Nakamura
The Mission Sermon of Paul at Thessalonica T. Haraguchi
Economy of the Divine Passion in Origen F. Matsumaru

BOOK REVIEWS :

- Osumi, Die Kompositionsgeschichte des Bundesbuches Y. Oono
Kawamura, Studies on Hebrews Y. Kasahara
Kinowaki, Studies on Erasmus Y. Tokuzen
Takayanagi, Studies on Karl Rahner M. Odagaki
Kondo, The Direction of the Theology of History Y. Sekikawa
Odagaki, Romanticism and the Contemporary Theology
..... A. Takamori
Kaneko, Phenomenology of the Holy M. Okano
Kato, Studies on Homiletics M. Ueda
and others

SYMPOSIUM :

- Contemporary Understandings of the Church
..... H. Shigeru, A. Demura, Y. Furuya, W. Mizugaki

LIST OF WRITINGS BY THE SOCIETY'S MEMBERS

Miscellaneous Reports

THE JAPAN SOCIETY OF CHRISTIAN STUDIES

Office : c/o Research Institute of Christian Culture,
Sophia University, 7-1, Kioichou, Chiyodaku, Tokyo 102, Japan
Distributed by KYO BUN KWAN, Tokyo, Price. ¥3,090 \$ 30.00
Printed in Japan